修了生の
学び・研究・実践

2025 年 大学院修了生交流会 記録集

東北公益文科大学
Tohoku University of Community Service and Science

研究科長メッセージ

公益学研究科長　**武田 真理子**

東北公益文科大学大学院 公益学研究科は、世界で唯一の公益学の研究・教育拠点として2005年4月に開設しました。修士課程に続き、2007年4月には山形で唯一の社会科学系の博士後期課程を開設しました。鶴岡市の一等地に素晴らしいキャンパスを建設して頂き、新しい学問である公益学を軸とした学び舎の誕生にご理解とご支援を頂きました庄内14市町村（当時）、山形県、地元企業、そして多くの市民の方々に深く感謝申し上げます。

お陰様でこの度、開設20周年を迎えることができました。2026年3月までに182名の公益学修士と5名の公益学博士を輩出しました。ポスト・コロナの2022年度からは、「社会変革期における課題解決に向けた公益学研究・教育と社会連携の推進」をビジョンに掲げ、大学院改革を推進しています。大学院の課題を整理し、その役割を見直すために多様なステークホルダーとの対話を重ねた結果、「学」と「社会」を結び付け、多様な人々の参画により持続可能な公益社会を実現するための人材育成と研究が求められていることを確認しました。

また、2026年4月より、東北公益文科大学の設置者は学校法人から公立大学法人に移行することになりました。酒田キャンパスには、新たに国際学部と英語教職課程を開設します。皆様にご支援いただき、また成長をあたたかく見守っていただきながら、本学大学院もようやく「成人」になったのだと考えています。ますます、地域、社会の発展に貢献する人材育成と研究に取り組むべく、機能強化を進めて参ります。

この大切な節目の時に、本学大学院の修了生の皆様にお集まりいただき、初となる「ホームカミング・デー」を開催できたことを嬉しく思います。当日は、各界でご活躍の修了生9名と教育活動にご協力を頂いている地域代表者1名にご発表を頂き、本学大学院における学修と研究の内容と成果、修得された知識とスキルを職場や社会の中でどのように活かされているかということを共有していただく機会になりました。社会の急激な変化の中での大学院における学修・研究の意義や大学院の課題についてもディスカッションを深めることができました。本誌はこの大切な時間の記録概要です。さらに多くの方々に本学大学院修了生の研究成果と思いを知っていただく機会となりましたら幸いです。

最後になりましたが、東北公益文科大学大学院「修了生の学び・研究・実践」におきまして、ご講演を賜りました酒田市長 矢口明子様、発表者の皆様、コーディネーターを務めてくださいました高谷時彦先生、伊藤眞知子先生、小野英一先生、運営にご尽力くださいました教職員の皆様に心より御礼を申し上げます。

基調講演

「東北公益文科大学大学院に期待すること」

酒田市長・本学元教授　**矢口 明子**

公益大大学院には「大人の学び舎」であってほしいと強く思います。東京や仙台の大学に行かなくても、論理的思考を高められますし、さまざまな分野の教員がいるため、自分の興味や関心のあることを学ぶことができますので、地域のみなさまにぜひ活用していただきたいです。公益大の教職員のみなさまには、18歳人口が減少することが明らかとなっている今、庄内地域・山形県の社会人を含めてみんなの学びの場になれば、これほど意義深いことはありませんので、そのことを意識していただくことが重要かと思います。

1995年の山形県新総合発展計画には「庄内地域に四年制大学を地域が主体となって設置する」という旨が記載されています。このたびの公益大の公立化は、まさにその具現化だと感じています。1998年に施行された特定非営利活動促進法では、行政が行う活動だけが公益ではなく、個人で行う活動も公益であるという旨が示されました。また、20世紀までは「公＝官」だと言われてきましたが、21世紀に入り「公＝官＋民」という考え方が注目されるようになりました。このようなことなどから、「公立化」といっても「＝（イコール）行政」ということではなく、あくまで地域代表としての行政であり、地域住民による公益に対する自由な議論を大事にして大学・大学院を運営してほしいな、と思います。

私は、行政の職に就いてから、以前よりも更に「公益に取り組んでいるのは行政だけではない」と考えるようになりました。民間企業も行政も公益活動に取り組んでいます。行政の平等という原理から取り組みきれない部分を、細かいけれども大切なことを地域のみなさんが担ってくださっている、役割分担しているのではないでしょうか。それぞれが地域を良くしたいという思いや取り組みが「公益」に通じています。これからも、民による公益、地域のみなさんによる公益の議論を大事にしていただけたら嬉しいです。

修了生の声

黒坂 貴子

自治体職員／修士課程修了「課題研究：天の川堂プロジェクト」

公益大大学院では多様な背景を持つ方と一緒に授業を受け、私では考えつかないような意見をお聞きできたこと、対話できる機会があったことは貴重でした。また、いつの間にか公務員色に染まっている、思考が硬直しているということにも気づかされました。公務員的に正しいことが地域・企業のみなさんの正義と同じということではないこともありますので、山形県内に対話する場・学びの場があるということは非常にありがたいことだと思います。

大学院で学び・研究を経験したことで、国外のデータや論文を探すことや英語で論文を読むことへの抵抗が少なくなりました。業務に関連した学びを大学院などで取り組むことは、モチベーションという形で業務に還元できています。ほんの少しだけでも、自分が業務の先を走っている、という感覚は心の余裕にもつながり、社会人の学びとして非常に効果的です。

後藤 好邦

自治体職員／修士課程修了「都市間比較型ベンチマーキングに関する研究 ―NPM 改革による公益性の向上を目指して」／博士後期課程在学中

20世紀は「正解がある成長社会」と言われ、21世紀は「正解がない成熟社会」で情報編集力や複眼思考、知識を実社会で応用するためのリテラシーなどが必要、と言われています。これにあたっては、ひとりひとりが探求力・研究力を習得・向上させる必要があると思います。また、これからの社会に求められる人材の例として「レゴブロック型」があります。ブロックはひとつひとつの役割が決まっていないことから、目指す形にするためにはそのブロックをどう使ったら良いのかを考える必要があります。その例を用いて、「発想力」「想像力」「実行力」がこれからの社会では必要な力と言われています。昨今は、民間企業に社会貢献が求められたり、行政に企業で使われてきた手法のマネジメントやマーケティングが求められるようになりました。従来の役割にプラスαが求められるようになったという時代背景から、国としてリスキリングを求めるようになったのではないかと考えています。

成長社会ではレールに乗っていればうまくいっていましたが、成熟社会では縦横無尽に広がるフィールドを冒険しなくてはなりません。冒険に必要なものはよく「勇気・知恵・仲間」と言われます。仕事や地域づくりに当てはめると、知恵は、「情報、エビデンスとデータを分析する力」ではないでしょうか。それにあたり大学院は非常に有益な場であると思います。

これまでと時代が大きく変わり、今までの常識が通用しない中、民間企業でも自治体でも、理論を実社会に実装する実務家が求められています。それにあたり、これから大学院での教育・学びの場としての大学院としての役割が更に必要になってくる、と感じています。

青木 孝弘

本学教員／他大学院にて修士課程修了、本学にて博士学位取得「ソーシャルビジネスの評価手法と基盤強化に関する研究」

NPO の実務家として経験を積んだ後、それまでの学びや公益学を深めたい、自分が取り組んでいる事業の価値を評価したいと思い、公益大大学院の博士後期課程に入学しました。在学中は、企業や海外の大学との共同研究に参画させていただき、共同研究の進め方や作り込みを経験することができました。このことは、その後、研究者・大学教員として勤め、知見を地域に還元するという業務に非常に活かされています。

修士課程・博士後期課程を修了するということは、「研究者としてのパスポートをもらう」ということだと思います。研究の価値を理解していますし、成果を見える化したいというときにそれを可能にする知識・スキルを持っています。また、企業や自治体の中に大学の研究事情に精通した人がいることは、産学官連携を進めるうえで、とても心強いものです。大学院を修了されたみなさんは、地域と大学とを繋いでいくファシリテーターというような役割をますます期待されるでしょう。

公益大では、複数の学問分野を横断的に学び、地域、企業と関わりを深めることで人材育成、課題解決につなげることを目標としています。新しい実践・理論を作っていくということが、公益学を研究する醍醐味で、この地域に公益大がある理由だと思います。公益大大学院で一緒に研究する仲間が増えて欲しいですね。

長谷川 和香

自治体職員／修士課程修了
「地方都市における中心市街地活性化に関する一考察 ―公共空間を中心に―」

大学院入学前は、「公務＝公益」だと思っていました。入学後に「公益学総論」という科目で、強制力があるものは公益には該当しないということから「税金は公益ではない」という考え方もあることを知り、驚いた記憶があります。

修士論文では、特定の個人やグループによる公共空間における実践・試行が中心市街地活性化に寄与する可能性を示しました。論文執筆・研究をとおして、個人でも「公益」にアクセスすることは意外と簡単かもしれない、個人が実践する些細なことが結果として公益になっていたという場合もあるのではないか、と考えるようになりました。また、その前段として、まずは個人として自分の興味関心を見つけることが一番重要ではないかと思いました。そのため修了後は、日本遺産検定・世界遺産検定の受験や勤務先の研修の積極的な受講など、興味がある分野について学ぶことが増えました。自分のための行動ではありますが、公益につながれば良いなと思っています。

社会人になってから学修・研究してみて思ったことは、好きなことを学ぶことは楽しいということと、自宅・勤務先以外の人との関わりができることは貴重ということです。学生時代の点数や成績のための勉強では味わえなかった感覚が大学院では感じられましたし、普通に生活していたら出会うことのなかった人との繋がりができ、今も続いています。

今後の公益大大学院には、専門的で高度な学問ができる場であると同時に、学修・研究の楽しさを地域に広げる場、サードプレイス（家庭でも職場・学校でもない第３の場所）形成の契機となる場であってほしい、と思います。今の時代、インターネットを活用して勉強することは簡単ですが、大学院に集うことの価値はあり続けると思います。

櫻井 廉

ハウスメーカー社員／公益学部卒業／修士課程修了「芸術・文化施設に対する公共部門の関与の在り方 ―庄内地域における費用負担の検討―」

学部時代に他大学との合同ゼミで研究をとおして切磋琢磨できたことが大変楽しく、それがきっかけで、大学院進学を決意しました。

大学院の学びを通じて得られたもののうち、もっとも大きかったものは、挫折の経験とその乗り越え方だと思います。一般的に研究は「先行研究のレビュー → 手法の検討 → データ収集 → データ分析 → 結論」という流れで進めます。実際に研究してみると、進んでは戻っての繰り返しでした。社会人となれば、仕事で課題に直面した時、まずは前例があるかを確認し、前例がなければどのような手法をとるのかを検討します。次に、会社にあるデータ・エビデンスを元になぜ問題が発生したのかを分析し、最後に解決のための実行をします。つまり、研究の流れとほとんど同じです。社会人になる前にこのことを経験できたため、スムーズに仕事に順応できたように思います。大学院では、学問そのものはもちろん、学修・研究を通じて、学部では得ることができなかった社会人力も得られたのだと思います。

公益大には、問題解決力などの社会人基礎力の向上と、それを実現することができる体制が整っています。社会に出る前の公益大の学部卒業生にこそ、大学院への進学をお勧めしたいです！私も、これからも変わらず学び続けることを大切にしたいです。

杉山 義法

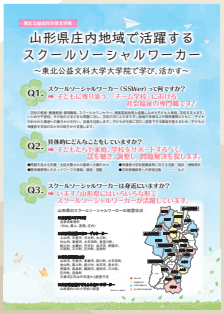
自治体職員／修士課程修了
「酒田市における子ども支援の実態と複合的課題解決のための方策に関する研究」

大学院ではスクールソーシャルワークについて研究し、修了後は、研究テーマに関連する業務に従事しています。研究で導き出したことに対し、今地域にある資源が不足していることを実感しており、解決は容易ではありません。科目・研究指導でお世話になった先生方には、事業の講師としてご協力いただくなど、大学院での縁を活用させていただいています。

「公益学総論」の中で印象に残っているキーワードは、「調和・調整・プロセス」です。また「揺らぎの中にあるからこそ発展していく」という言葉も覚えています。今改めて「公益」について考えると、最近では「ハーモニー（調和）」よりも「ポリフォニー（多声性）」が重要かもしれないと思うことがあります。また、対話を継続することが社会の変化に通じていくのではないか、と考えています。ひとりでできることは限られていますので、業務においては地域のみなさんとの対話を大切にしていきたいですね。

スクールソーシャルワークや杉山さんの実践等については別紙にてご覧ください

本学大学院HP
SSW教育課程



鈴木 崇史

自治体職員／修士課程修了「防災における共助の促進に関する研究」

私は自治体職員として業務にあたっていく中で課題意識を持ち、公益大大学院の科目等履修生として学びました。それを経て、職員研修のひとつとして大学院入学しました（就学派遣）。

公益大には、さまざまな分野の教員がいるため、自分自身の興味がある分野を学ぶことができます。また、私は、研究指導教員ではない先生が主催する自主勉強会にも積極的に参加させていただきました。他分野の視点を自分の研究に活かすことで、研究の幅が広がり、深まったと感じています。

授業は少人数かつ能動的に展開されます。これにより考える癖・習慣が身に付き、他の方の考えを知ることの楽しさも知りました。「地域共創コーディネーター養成プログラム」で培われたファシリテーションとコーディネーションのスキルは、業務におけるワークショップ、ミーティング、対外的な折衝の場面等で活用できており、大学院で得られたことは非常に多いです。

これからの公益大には、更なる地域との関わりを期待します。学生のみなさんが大学の外へ飛び出していくことで、社会に対する理解が深まったり、複数性の視野を獲得できることにも繋がると思います。また、高校を卒業したばかりの若い人だけが学ぶ場所というだけではなく、地域社会と大学が繋がっていることが望ましいのではないかと思います。地域のニーズと大学のシーズがマッチすれば、より良い未来が築けるはずです。東北地方は「社会課題先進地」と言われますが、庄内地域・山形県は「社会課題『解決』先進地」になる、それにあたり公益大が担うことができる部分があるのではないか、と考えています。

伊藤 眞子

高等専門学校 教員／修士課程修了「産学官が連携した地域ブランド商品開発の事例研究 ―ブドウ剪定枝燻製プロジェクト過程の分析―」

私は工学・理学を専門とする女性ということで、その当時の時代背景もありましたが、女性としては初めてということが多く、働く上では苦労の連続でした。

そういったことを乗り越えてきた今、思うことは「人との繋がりが１番大事」ということです。今までの勤務先はほとんどが人からの紹介でした。仕事でもプライベートでも困ったことやつらいことがあったときには、その時その時でメンターがそばにいて「眞子さんはそのままでいいんだよ」と言ってくれました。公益大大学院には「すっごくいい先生がいる」と紹介されて入学しました。研究指導教員の先生には「研究者」という同じ立場で相談にのっていただき、私の人生において大変貴重なものとなりました。

大人になると人と少し距離ができる・関係が浅くなって言えないことが多くなりますよね。公益大大学院では、講義や研究を通じて、自分の意見を本気で言える場で、相手の本気の意見も聞ける場だと感じています。本音で・本気で、そしてポジティブに話せる場所は案外無いものです。公益大大学院での学び、経験というのは、相手・自分・地域を良くしていくことに通じていくと思います。

地域共創コーディネーター養成プログラム

共創の技法

ボランティアコーディネーション力３級検定

合意形成・コーディネーション論

多様なメンバー間の対話を進めるファシリテーションと、多様なメンバーによる連携や協働による課題解決の実践を仕掛けるコーディネーションの力を身に付ける

＋

プロジェクト a
―パートナーシップに基づく地域課題解決の推進―
（2022 年 ～ 2024 年）

地域課題解決を実現するためのプラットフォームの構築、課題解決に向けたプロセス／プログラム／マネジメント・デザインの実践を体験的に学修する

フィールドは鶴岡市朝日地域
多様な住民同士の対話の場づくり（地域語り合い）
Web 上のプラットフォーム設立・活用

◆「プロジェクト a」受講者　斉藤 友香

自治体職員／修士課程修了
「地域コミュニティにおけるまちづくりへの若者参画に関する一考察 ―鶴岡市加茂地域の事例を中心に―」

地域共創コーディネーター養成プログラムで得た学び（スキル・マインド）をプロジェクトaで実践したことで、課題解決における対話の価値を検証し、共有・共感を対話を通しておこない、そこから価値創造の共創に繋げるということを体感できました。また、学びを深められた、学びの継続が重要であることを感じました。そして、地域での課題解決のための対話の場を設けるにあたり、コミセン職員だけ・自治体職員だけではなく、みなさんと一緒に協働することで多様性を確保することにより、持続可能性が高まったと思います。

公益大の公開講座を核として、人との出会いが創出され、仲間づくりができています。その仲間たちと共に、朝日地域だけではなく、この地域の課題解決の一役を担うことができたら、と思いますし、その仲間が今後も増えてくれることを期待しています。

◆「プロジェクト a」受入れ　難波 志津香

自治振興会職員／地域共創コーディネーター マスター養成プログラム修了生

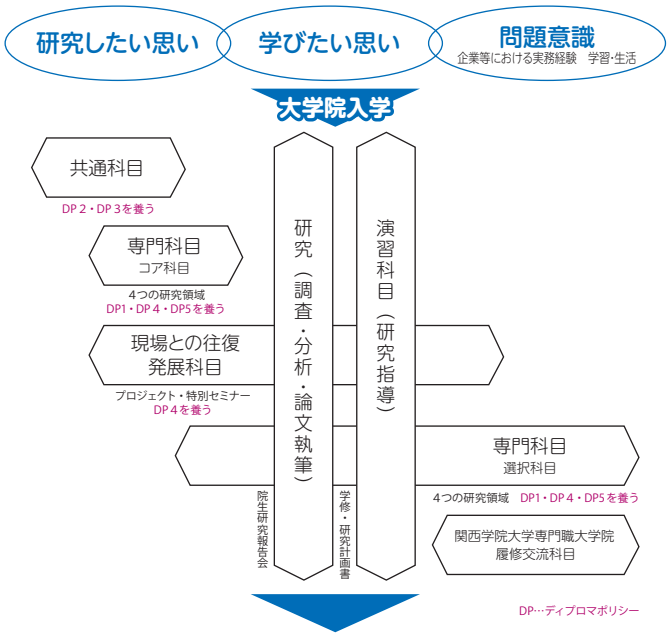
プロジェクトaで実践したワークショップでは、住民のみなさんははじめは戸惑う様子でしたが、ファシリテーターの進行のおかげで、対等に思いを語り共有する場ということを理解され、朝日地域の好きなところや困っていることなど、実は心の中にあった思いを積極的に発散する貴重な機会となりました。それを多世代で共有できた経験は、住民が地域課題を「自分ゴト」として捉える大きなきっかけになったと思います。

また、朝日中学校の全校生徒、地域住民、保護者を対象に大規模なワークショップを行いました。参加者の子どもと大人が対等に自由に意見を出し合う機会となりました。大人に自分の意見を受け止めてもらう経験は、中学生にとって大きな成功体験となり、朝日地域の一員だという自信と自覚を持つことにつながったと思います。大人の参加者も、中学生のしっかりした意見や思いを知ることで、その後の関わり方にも変化が現れ、地域行事の運営に中学生が参画する地域も出てきました。自治振興会にとっては、過疎化が進む朝日地域で、世代を越えた対話を生み出したこの手法は、必要な学びとなりました。

地域語り合いは今後も続けていきたい大切な事業です。子どもたちがワークショップを経験していることで、5年後・10年後にはふるさと朝日の力になってくれると期待しています。また、世代を越えた知り合いが増え、声を掛け合う関係が築けたこともうれしいことです。「プロジェクトa」は地域にとって大きな支援となりました。これからも引き続き、いただいた支援にならいながら、地域のみなさんとともに朝日らしい地域づくりに励んでいきます。

庄内地域にこのようなデザインスキルを学べる大学院があること、そのスキルを持つ大学生がいることは非常に心強く、地域づくりの力になってくれることを実感しています。これから、ますますそのような人材が増えていくことを期待しています。

公益大大学院について



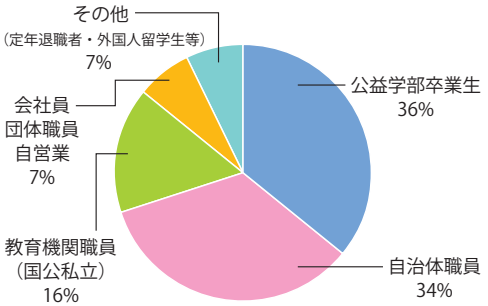
研究成果　知識・スキル・論理的思考
専門に捕らわれない柔軟性　説明・コミュニケーション能力
人的ネットワーク　社会・経済的価値の判断・創出能力

大学院修了

養成する人材像に重なるような活躍・キャリアアップ
自己成長　現場の課題解決

多様な学生が共に学び・研究しています

修士課程：2019年度から2025年度までの入学者



◆近年の修士論文のテーマ

- コンパクトシティにおける集約地　－酒田市の立地適正化に関する検討－
- 山形県における生活排水処理施設の持続的な経営と普及の推進に係る研究
- 災害時の児童の避難行動について行政が果たすべき注意義務は何か　－大川小学校津波訴訟を手掛かりとして－
- 地方都市における必要老後資金の実態に関する分析
- サイバー空間における国際法上の「帰属」と「相当の注意義務」の適用限界
- 生きづらさを抱える高校生に対するスクールソーシャルワークを通した支援に関する研究
  －生徒のニーズキャッチに着目して－
- 観光資源としての城郭に関する考察　～城郭の運営と活用についての分析を中心として～
- 明治後期における教育と公益　－齋藤七郎を事例として－
- 「荘内婦人会」創設の意義とその動向　－近代初期の鶴岡の女性たちに着目して－
- 高校野球におけるあがりのメカニズムとメンタルトレーニングの効果に関する検討

◆科目等履修生

正科生以外も、大学院で開講する科目を１科目から履修することができます。詳しくはお問い合わせください。

東北公益文科大学　大学院事務室
電話　0235-29-0555　メールアドレス　gs@koeki-u.ac.jp
住所　山形県鶴岡市馬場町14-1
HP　https://www.koeki-u.ac.jp/academics/gs/

大学院HP

この冊子は2025年度鶴岡市課題解決事業の支援を受けて作成しました